

資 料

ドイツ語読解の戦略と戦術 (1)

——読解過程／読解の戦略と読解学習の戦略／
理解の第一歩としての概要把握——

原 口 厚

本資料作成の趣旨

外国語教育の中心的目標は、通訳や翻訳を介することなくやり取りできる〈直接交渉能力〉の育成である⁽¹⁾。しかし日本では、英語以外の外国語については、ほとんどの学生が大学から勉学を開始することに加えて、使用可能な授業時間数も少ない。そしてドイツ語の場合、日本はドイツ語圏から遠く、人的交流もさほどではないことから、ヨーロッパにおけるように話し、聞く能力を求められる機会は少ない。こうした条件を勘案した場合、授業の中でドイツ語について〈話す〉、〈聞く〉、〈読む〉、〈書く〉の全般にわたる高度な能力の完成を図ることは現実的とは言えない。

意思疎通（コミュニケーション）にあたっては、いかに話し、書くかといった言語技能が十分であるとしても、伝達される内容が貧弱、空疎であれば、その実は上がらない。したがって対象となる物事についての知識や意見の内容、見識などもまたコミュニケーション能力を構成する不可欠の一部である。我々はこれらの多くを、書籍や新聞、そして今日では各種のサイトなども読むこと

を通じて身につけている。したがって、母語のみならず外国語が読めることは、質と量の両面においてその拡大と向上に大きく貢献する。

今日の日本は、国外からの知識・情報の多くを英語を介して英米圏から得ている。そこで我々は無意識のうちに日本と英米圏の二極構造の中で物事を考えがちである。しかしながら、「情報は二線、三線での交叉点を求める式の取り組みをやらないと、真偽の判断は難しい」（堀，p. 51）ことを考えるならば、英米圏からの情報に対する過度の依存には問題が大きい。そこで国の安全保障を図るうえで、他の言語文化圏からの情報によるもう一つの極を立てることによって内容を相対化し、精度を確保する能力は貴重である。そこでこのような観点から、ドイツ語教育を読解能力の育成に絞って行うことは一つの現実的かつ有益な目標であるといえよう⁽²⁾。

これに対して、適切な読解授業を行うことは一般に容易ではない。その最大の理由は、内容的に大学生が読むに値するテキストに対して、学生の言語的能力、とりわけ語彙力が脆弱なことである。そこでこの乖離を埋めるために広く用いられている読解・授業方法が訳読法である。確かに訳読法は未知の語彙を多く含むテキストを読ませるには簡便な方法である。また学習者のテキスト理解度を知るうえでも、手軽かつ便利である。さらに文構造が入り組んだ箇所などを正確に理解する際にも有効な方法である。

しかしその一方で訳読法では、〈未知の語彙をすべて辞書で引いたか〉、〈一文一文を文法的に正確に訳したか〉といった、内容理解とは直接関係しないことが問題とされることも少なくない。そうした授業は、とすれば〈教室内作法〉修練の場となりがちである。その結果、肝心のテキスト内容の全体的理解が二の次とされることも稀ではない。また日本語による訳語や訳文の案出に時間と労力をとられることから、一般に読む量は低い水準にとどまる。これに対して、実際に勉強や仕事などでテキストを読むためには、分らない箇所などはうまくやり過ごしつつ、まず早く大量にテキストを概観し、その骨子を把握で

きななければならない。訳読的な正確な理解は、こうして重要な個所とそうでないところの判別をつけてからのことである。また読解力育成のためにも、大量に読むことが必要である。そこで訳読法は、読解の実際上の要請に合致していないのみならず、〈すべての語や文法が分からなければ読めない〉、〈辞書がなければ何もできない〉という誤った読解観を学習者に植え付けてしまうという点で何よりも問題である。

読解過程に関する認知心理学などからの研究成果によれば、人間は語彙や文法といった言語的知識のみによってテキストを理解しているわけではない。そこで同時に不可欠の役割を果たしているのが、テキスト内容に関するスキーマや背景的知識などの非言語的知識である。こうした知見に基づく反省から、今日では非言語的知識を積極的に活用する読解法（ここでは仮に〈内容的知識重視型読解法〉とする）がしばしば推奨される。しかしこうした方法には限界があることもまた確かである。未知の語彙への対処について言えば、内容的知識重視型読解法では背景的知識や前後関係などから意味内容を推測することが推奨される。しかし初歩的学習者の場合、その手掛りとなる周辺の語についても未知であることが多いことから、これを実行するのはそれほど容易ではない。そこで内容的知識重視型読解法が説くところはもっともではあっても、そのままでは〈絵に描いた餅〉であり、実際の助けとはなりにくい。したがってテキスト理解にとって非言語的知識の活用が不可欠であることは当然としても、言語的知識の蓄積もまた同時に不可欠である。そしてこれは内容的知識重視型読解法を十分に機能させるという観点からも必要であり、そのためには単なる〈勧め〉以上の何らかの具体的支援策が必要である。

そこで読解教育に求められるのは、内容的知識重視型読解法が目標とするところと言語的知識拡充の戦略的結合、すなわち、内容的知識などの活用によって言語的知識の不足を補う一方で、言語的知識・能力の底上げを図り、両者の相乗作用の中で読解能力の育成を追求する〈二正面作戦〉を統一的に行うこと

である。今日は各研究領域や学科目の専門分化が著しく、ともすれば互いに切り離され、タコ壺化しがちである。そうであればこそ、大学教育に必要なのは、「この『切る』パラダイムに対立する『繋ぎ、繋がる』というパラダイムに立つ行動」(宇田川, p. 59)であり、外国語教育もまたその例外ではない。

日本の外国語教育は、近代化の要請のもとで、まず語彙や文法といった言語的知識を短期集中的に詰め込み、これに基づく訳読によって何らかの有用な知識を獲得するという方向でもっぱら行われてきた。これは〈ことば〉から〈知識〉へという方向性である。しかし外国語習得にもっとも良いのは、使用の現場であり、そこからの体験的・帰納的学習である。このことを考えるならば、読解授業に必要なのは〈使う中からことばを学ぶ〉という方向性を授業の中に組み込むことである。具体的には、内容的知識の援用のもとに、今とりあえずできることを活用してテキストを読む中から自力でことばを獲得して進む〈知識からことばへ〉という方向での授業展開である。

このことはまた、自立的外国語学習能力の育成という観点からも必要である。多くの学生にとって、外国語の実践能力が求められるのは、在学中よりもむしろ実社会においてである。しかし〈その日〉のためにドイツ語能力の維持を図ることは非現実的である。また他の外国語の能力が求められることも十分に考えられる。これらの事情を勘案するならば、大学における外国語教育の一つの重要な柱となるのは、個別の言語の枠を超えて、卒業後の人生において外国語の運用や勉強が必要となった際に、これに自立的に対処できる基本的態度・能力を育成することである。そしてそのためにも、授業は何らかの直接交渉能力の形成を実体験するものでなければならない。とりわけ生活や仕事を抱える社会人の場合、学生のように外国語の勉強自体を目的として教室で悠長に語彙や文法の拡充を図っている余裕はない。外国語を学ぶのは一般に生活や仕事上の必要からであり、手段としてである。また勉強中といえども、とりあえず使わなければならない場面も少なくないと考えられる。こうしたことから

また、読解教育に必要なのは、読解の実態に即した形でテキストを読み進める中から自足的に言語的知識の拡充をはかるという方向性である。

日本のドイツ語教育においては、読むことが広く行われている。しかし筆者が知る限り、読解法や読解教育に関する研究が盛んであるとはいえない。また読解法に関する教科書、参考書などもほとんど出版されていない。そこで及ばずながら筆者は、1995年度以来〈外国語Ⅲ ドイツ語読解法〉の場を借りて、研究と実践を模索してきた。またこれと並行して、ドイツ語読解教育に対する考え方と理論的背景、授業内容などに関する論文なども発表してきた。しかしこれは教員と大学関係者に向けてのものであり、そのままでは学生が読解法を学ぶ参考とはなりにくい。

そこで今回これらの内容に授業時の教材や解説、小言なども加え、学生を対象とする〈手引き〉の形に整理を試みたのが本稿である。今回は読解過程、読解と読解学習の戦略、戦術としての概要把握について述べる。次回以降、〈文法の戦術〉、〈語彙の戦術〉、〈総合演習〉を予定している。本稿は〈手引き〉としては理屈が多く、〈マニュアル〉とはその趣を異にする。これはあえてしたことである。それは学生に読解がどのような仕組みで行われ、テキストを読むにはどうすればよいかの原理を自分の頭と体で理解してほしいからである。〈こうした場合はこうせよ〉といった項目羅列的な一対一対応の〈マニュアル〉は簡便である一方、応用がきかないという点で非効率的である。原理が分かっているならば、自ら工夫を加えて他の外国語に対して、あるいは外国語以外の問題にも応用が可能である。これこそが生涯学習社会における自立的学習能力の源であり、このような原理や考え方についての学習機会を提供することが大学という高等教育機関の使命である。

本稿は従来の文法訳読法と、単なる内容的知識重視型読解法の勧めの問題点に対する現時点での筆者なりの改善提案である。しかしまだ内容的に十分とは到底いえない。本来は更に研究を加え、練り上げて〈完璧〉を期したうえで公

表すべきであろう。しかし残された時間と投入可能な労力は限られている。そこで可能であれば、今回扱うことができなかつた問題なども加えて、連載終了後にもう一度まとめ直すこととし、筆者もまた〈今とりあえずできること〉を試みた次第である。趣旨を諒解されたい。

本稿が曲がりなりにも成立したのは、読解授業のありかたについて考えるきっかけを与えてくれ、試行錯誤を重ねる〈教育実習〉的な筆者の授業に付き合ってくれた学生諸君あつてのことである。この場を借りて、歴代の履修者諸君に感謝の意を表したい。

註(1) 外国語を学ぶ目的は実用だけではない。この問題についての筆者の考えは、下の学生向け配付資料に述べたとおりである。しかし本稿では、(2)と(3)については立ち入らず、(1)の〈実用〉という観点に絞って読解について考えることとする。

なぜ大学で外国語を学ぶのか

早稲田大学商学部・原口 厚
2011年3月26日

国際化の中で外国語の能力が重要であることはいうまでもないでしょう。しかし外国語を学ぶ意義は、一般に考えられているような〈実用〉だけにとどまるものではありません。なぜ大学で外国語を学ぶのかという問題は、おおよそ次の三つの層に整理して考えると分かりやすいと思います。

(1) 直接交渉能力の獲得

外国語を習得すると、みなさんは日本語に翻訳されていない本や、雑誌、ネットのサイト、あるいは専攻する研究に関する専門書や論文が読めるようになったり、通訳なしで話ができるといった直接交渉能力が獲得できます。しかしこれは目に見える表層的な効用にすぎません。

(2) 一般的知識と当該文化圏についての背景的知識の獲得

外国語を学ぶと、いろいろな物事についての〈一般的知識〉やその言語圏の文化や歴史、社会といった〈背景的知識〉などが必然的に話題になります。私たちは語彙や文法といった狭義の言語的知識だけでことばを理解しているわけではありません。そこでこうした〈言語外の知識〉を広く身につけておくことは、ことばをよりよく理解したり発信するための不可欠の前提であると同時に、それ自体としても、みなさんにとって貴重な知的財産となります。

(3) 情報の相関・整理統合・解釈の訓練

人間は狭義の言語的知識と(2)に挙げたような知識を、さらに判断力、演繹・推論能力などを使って相関させ、整理統合し、解釈することによってはじめてことばを理解し、発信しています。通

常はほとんど意識されないこうした脳の働きは、巨大な情報処理プロセスである外国語の学習と運用を通じて確実に身につく、さらに他の分野の勉強や仕事などにも転用が可能です。こうした〈頭の体操〉は、いわば氷山の水面下の部分に相当するような、外国語学習の隠れた効用といえるでしょう。

そしてさらにこうした各層が刺激し合い、相互に作用しあうなかで、人間、特に若いみなさんは知的に大きく成長します。グローバル化が進むなかで、みなさんのこれからの長い人生で求められるのは、偏差値に象徴されるような相対的な順位ではなく、国際社会でも通用する絶対的な学力であり、実力です。大学という高等教育機関で外国語を学び、奥行きのある知的能力を形成することは、上に述べたような複合的な観点からこれに大きく貢献します。

- (2) 本稿は、一年次に発音から接続法までの文法項目をひとつおとり扱い、二次以降は読解、会話等を行うという一般的な枠組みで行われるドイツ語教育を前提とする。これ自体を改めるべきか否かという議論には立ち入らない。

引用文献

- 宇田川晴義. (1998). 「新しい教養教育の理念—『切る』パラダイムからの転換」. 『大学教育学会誌』, 第20巻 第2号, pp. 57-60.
- 堀栄三. (1996). 大本営参謀の情報戦記 —情報なき国家の悲劇. 文春文庫.

手引き

ドイツ語読解の戦略と戦術 (1)

——読解過程・読解と読解学習の戦略・
理解の第一歩としての概要把握——

2012年3月

早稲田大学商学部

原 口 厚

目次

0. はじめに	237
0.1. 言語的知識と非言語的知識	240
0.2. 〈テキスト〉と実用テキスト／文学テキスト	243
1. 読むとはどういうことか	244
1.1. 上昇型処理と下降型処理	244
1.2. スキーマ	246
1.3. ことばと全体的脈絡	250
1.4. ことばと解釈	252
1.5. 未知の語彙とテキスト内容の把握	254
1.6. 総力戦としての読解	256
2. 読解と読解学習の戦略	258
2.1. 戦略と戦術	258
2.2. 読解の戦略	259
2.3. 読解学習の戦略	260
2.4. 何を読むか	262
2.5. 個人的体験	263

3. ドイツ語読解の戦術	265
3.1. 理解の第一歩としての概要把握	266
3.1.1. 訳読よりもまず概要の把握を	266
3.1.2. 表題・見出しによって内容スキーマの活性化を	268
3.1.3. まず通読を	269
3.1.4. 辞書は少なく引く努力を	271
3.1.5. 日本語の読解力を	273
4. 演習	276
4.1. 基本演習 Gomoku Chahan	276
4.2. 応用演習 1 Rindergulasch	282
4.3. 応用演習 2 Reibekuchen	284
5. 推薦図書	288
6. おわりに	290
註	290
参考文献	291
教材出典	291

0. はじめに

日本では英語以外の外国語は通常大学で勉学を開始する。一般に授業時間数も少ない。比較的多い早稲田大学商学部の場合でも、90分の授業が一年間で約60回である。したがって二年間のドイツ語授業を、単純に時間数だけで中学校の英語と比較すると、1, 2年生分にも及ばない程度である。したがって二年次が終了しても、文法の定着が十分ではなく、語彙も乏しいという諸君も少な

くないであろう。

しかし見方を変えれば、ドイツ語を専門とするわけではない学生にとってこれはなかなかの成果であるともいえる。一年次にひと通り学ぶ文法事項は、ドイツ語の基本的な使用に必要とされるほとんどの事項を網羅しており、英語の場合、中学1年から高校の1、2年生くらいまでの内容に匹敵する。また〈読む〉ことについて言えば、二年次の秋学期に使用している〈統一教材〉のテキストは、ドイツ語圏の母語話者を対象とする新聞などから集めたものであり、その難易度は少なくとも高校の英語の読解教材に匹敵しよう。少なからぬ諸君は、これが一年半ほどで曲がりなりにも分かるようになるのである。何でも時間をかければよいというものではない。多様な課題への対応が求められる現代においては、むしろ逆に少ない時間で効果を挙げることが必要である。

英語に比べてドイツ語の習得が相対的に〈速い〉理由の一つは、6年間にわたる英語の学習歴である。ドイツ語は、英語では消滅したさまざまな語形変化を残すなど、学習にあたって面倒な面が少なくない。しかし両者は同じゲルマン語という近親関係にあり、文法の大きな枠組みは似ている。また同じゲルマン語系の語以外にも、ラテン語やフランス語などに由来する類似の語が多いなど語彙面でも共通性は少なくない。こうした〈モノ〉的な言語的背景、そして更に英語を学んだという〈コト〉としての学習経験がドイツ語の勉学に対して追い風となっている。

もう一つの理由は、英語を学びはじめたころよりも諸君の年齢は高く、知的に成長していることである。もっぱら暗記力や刺激に対する反応だけが必要なのであれば、中学生、それどころか小学生などの方が習得が良いであろう。しかし外国語の理解や表出にあたっては、言語外が多様な背景的知識や判断力などが必然的にかかわってくる。こうした点では、これまでに外国語以外の学科目も学び、社会・生活経験なども豊富な大学生の方が有利である。このことは広範な知識に加えて、何よりも〈考える〉ことが必要とされる〈読む〉ことに

ついて特に該当する。

したがって、少なからぬ諸君はドイツ語を二年間学んで、潜在的には〈いい線〉まできている。使いものになる読解力まであと一押しである⁽¹⁾。このことを自覚してか、三、四年次の外国語Ⅲでもドイツ語を選択する諸君が少なくない。しかしテキストを早く、大量に読むためには、文法や語彙といった点でまだまだ不十分であるのも事実である。しかし問題は、全くの初歩ではない今の段階で、何をどのように学ぶかである。文法や語彙を〈完璧〉に仕上げたから読むことに取り掛かろうなどと考えていたら、一生はいくつあっても足りない。そして外国語の勉学に最適なのは使用の現場である。これらのことを考えるならば、諸君に必要なのは、今手持ちの語彙や文法を元手にしてとりあえず読み始め、〈ことばを使う中からことばを学ぶ〉という方向性である。

現在、そして今後の社会の動向を考えるならば、多くの諸君にとって、外国語の能力が求められるのは、むしろ実社会においてであろう。しかしいつ来るかわからない〈その日〉のために、ドイツ語の能力を維持し続けるわけにもゆかない。そして大学でドイツ語を履修したとしても、他の外国語の運用や勉学が求められることも十分に考えられる。これらの事情を勘案するならば、諸君に今必要なのは、在学中にドイツ語という土俵の上で一度実戦的な外国語の運用能力形成を体験することによって、広く外国語の運用と勉学のしかたを身につけておくことである。語彙や文法は忘れても、こうした経験と技能は残り、他の外国語にも応用が可能である。これによって将来、何らかの外国語の勉学や運用が必要となった時に、円滑な対応が可能となるであろう。

本稿は〈手引き〉というには理屈が多く、〈マニュアル〉とは趣を異にする。それは諸君に読解がどのような仕組みで行われ、これを生かしてテキストを読むにはどうすればよいかの原理を自分の頭と体で理解してほしいからである。手を引かれても、実際に考え、歩くのは諸君自身である。またいつまでも手を引かれて歩むわけにもゆかない。〈こうした場合はこうせよ〉といった項目羅

列的な一対一対応の〈マニュアル〉は簡便である一方、応用がきかないという点で非効率である。原理が分かっているならば、自ら工夫を加えて他の外国語に対して、あるいは外国語以外の問題にも応用が可能である。

現代は社会の変化が速く、物事は複雑化している。そこに生きるわれわれは、知識や技能を更新し、あるいは新たに学び加えてゆかなければならない。したがって、勉学は大学を卒業すれば終了ではなく、一生にわたって不可欠である。むしろ社会に出てからこそ、生活と仕事の両面にわたって多くの勉学が必要となるであろう。こうした生涯学習社会において必要なのは自立的学習能力である。そしてその源は、今後もおそらく大きく変わることはないであろう原理的問題の理解である。専門学校などの目標は、適応とノウ・ハウの追求である。これに対して大学という高等教育機関は原理や考え方を追究する場である。そのためには相応の知力が必要であり、これもまた本を読み、原理的問題を考え、学ぶことによって鍛えられる。

本手引きはこのような観点から、ドイツ語の初歩的文法をひと通り学んだ諸君を対象とし、乏しい文法と語彙から始めて、いかにテキストを読むかという〈弱者が強者を倒す〉ための戦略と戦術を提示しようとするものである。結論から先に言っておくと、テキストの各部分と全体の往還運動の中で、比較的分かりやすいところをまず突破し、そこを足場にして理解を広げることである。そしてその過程の中で、テキストから〈ことば〉を学びとることによって自己の強化を図る〈ゲリラ戦〉を粘り強く展開することである。外国語をはじめとする勉学は、得点芸や〈お作法のお稽古〉などではなく、対象と全身で取り組む知的格闘技である。したがって、〈やる気〉と〈粘り〉こそが長期戦を戦い抜き、最終的勝利に至る決定的要因である。健闘を祈る。

0.1. 言語的知識と非言語的知識

本手引きでは〈言語的知識〉と〈非言語的知識〉ということは⁽²⁾を頻繁に使

用する。両者を截然と区別することは難しい。しかしこの手引きで言語的知識という場合は、日本語やドイツ語といったことばについての知識、すなわちその語彙や文法、テキスト構造等についての知識を指すものとする。これに対して非言語的知識は、テキストの内容面にかかわる〈既有知識〉、〈世界知識〉、〈内容的知識〉、〈背景的知識〉、〈専門的知識〉などを表していると考えてほしい。

Den Griechen stehen sehr heiÙe Tage bevor:

(aus: Frankfurter Rundschau 13. 08. 2010)

ギリシャの人々に酷暑の日々が迫っている。

この文について言えば、おおよそ次のようなことが言語的知識である。

この文の定動詞は *bevorstehen* である。*bevor* が文末にあるのは、分離動詞だからである。時制は現在である。主語は複数1格形の *heiÙe Tage* であり、*Den Griechen* は複数3格である。ドイツ語では英語と異なり、主語は必ずしも定動詞の前にあるとは限らない。この文もその一例である。〈1格 + *bevorstehen* + 3格〉でおおよそ〈1格のことが3格の人に急迫している〉ということを表す。[…]

これに対して非言語的知識とは、一例として、次のようなものである。

地球の北半球にヨーロッパという地域があり、バルカン半島の南端にアテネを首都とするギリシャという国がある。北はアルバニアとマケドニア、ブルガリアと接し、東南は海をはさんでトルコである。北半球では8月は一般に高温期である。ギリシャの緯度は南日本ほどであり、平常でも夏は暑い。したがって、新聞が〈非常に暑い〉とことさらに報ずるのは、

よほどの高温が予想されるからであろう。〔…〕

この手引きでは非言語的知識を更に下位区分して、〈既有知識〉、〈世界知識〉、〈一般常識〉、〈内容的知識〉、〈背景的知識〉、〈専門的知識〉を論述の都合に合わせて適宜使用する。しかしどの用語も言語的知識に対しての非言語的知識という点では同じである。これらは、非言語的知識をどのような観点から見るかに対応した表現であり、互いに重複し、意味内容的に大きな違いはない。ただし、それぞれの観点や意味の重点はおおよそ次のとおりである。

〈既有知識〉：テキストを読む時点で既に持ち合わせている知識。これは特にテキストから新たに獲得する〈新知識〉、〈新情報〉などとの対立という点に重心がある。

〈世界知識〉：われわれが、自らと周囲の世界について身につけている一切合切の知識。〈一般常識〉もその一部である。〈水1mlは約1gである〉／〈鉄は錆びる〉／〈犯罪者は手をつくして、摘発や逮捕を避けようとする〉／〈さつまい芋は寒冷地では栽培できない〉／〈歯痛を喜ぶ人は例外的である〉等々。

〈内容的知識〉：テキストに書かれている内容に関する知識。

〈背景的知識〉：テキスト内容の背景に関する知識。〈内容的知識〉とも重なる。

〈専門的知識〉：当該の問題や分野について、〈一般常識〉や〈内容的知識〉よりも詳しく、深い知識。

0.2. 〈テキスト〉と実用テキスト／文学テキスト

〈テキスト (Text)〉ということばの原義は、ラテン語の〈texere〉(織る、編む)に由来する〈textus〉(織物、編んだもの)である。これは織物が、繊維をより合せて作られた糸を縦・横に組み合わせて織り上げられるのと同様に、テキストも語や文が互いに関係しあって形成されていることを意味している。そこでテキストにおいては、語や文はバラバラに存在するのではなく、その全体性の中で個々の役割を果たしつつ相互に関係していることにまず留意してほしい。

テキストは、その内容や機能に応じて様々に分類することができる。その一つが実用テキストと文学テキストに分ける方法である。もとより両者は截然と分けられるものではない。しかし実用テキストとは、新聞、雑誌の報道記事や専門書などのように、テキスト外に存在する何らかの内容を読者に伝えることに主眼を置くものである。単純化して言えば、その重点は〈何を伝えるか〉であり、ことばはそのための〈道具〉と位置付けられる。これに対して文学テキストの場合は、何を伝えるかとならんで、あるいはそれ以上に重要なのが、〈どのように伝えるか〉である。ここではことばはいわば主役であり、語彙や文体の選択などについて実用テキスト以上に工夫がこらされることとなる。極論すれば、文学テキストはことばのみによって構成される言語宇宙である。

一般に社会や経済などについての専門書は難しく、小説などは読みやすいと思われる。これはもとよりテキスト次第である。しかし専門書が往々にして難しいのは、ことばというよりも、そこに書かれている内容自体が難しいことによる場合も少なくない。また小説なども、単に筋を追うだけではなく、あることばで何が含意されているかなどに考えをめぐらせるならば、一筋縄ではゆかない。テキストのこのような性格の違いを考慮すると、初学者にとって、ことば自体に対する依存度が高い文学テキストに対処することは一般に困難が大きい。これに対して、実用テキストでは、後に詳しく述べるように、内容の

理解にあたって、世界知識や背景的知識などを援用できる場合が多く、ことば自体にかかる負担が軽減されやすい。特に統計数値などが多く出てくるテキストは、これらが内容の推測、理解にとって重要な手掛かりとなり、そこからことばを獲得できる機会も少なくない。こうした理由から、本手引きは基本的に実用テキストを読むことを目標とする。

1. 読むとはどういうことか

そもそも人間はどのようにして外界を、そしてことばを理解しているのだろうか。本章では、読解の戦略と戦術を考える理論的基盤として、いくつかの実験を通して〈読む〉ことがどのような仕組みで行われているかについてまず概観しておきたい。

1.1. 上昇型処理と下降型処理

次の図は何だろうか。

図 1



R. C. James (photographer). Courtesy of the photographer.

(Westhoff G. J., p. 31)

答は〈インクのしみ〉である。しかしそれでは諸君は納得できないであろう。無意識のうちに、このしみをつなぎ合わせて、何らかの絵柄として〈読もう〉としているはずである。夜空に散らばっている星を勝手に線で結んで、〈北斗七星〉や〈オリオン座〉などとするのと同じである。したがって何に見立てるのも自由である。〈正解〉はない。しかし経験上、多くの諸君から返ってくる答は、〈公園の樹木手前の地面を嗅ぐ犬〉である。その際に注意してほしいのは、そこに〈見える〉のは通常われわれが知っている物事の範囲の中で何らかのものだということである。このことは、インクのしみの形や配列が、それが何に見えるかを規定していると同時に、逆に我々が何を知っているかがこのインクのしみを整序配列し、その見え方を規定しているということである。

人間が何かを見ると、その光波情報は網膜を通じて神経信号に変換され、脳に伝達される。このような方向の情報処理は〈上昇型処理〉・〈データ駆動型処理〉と呼ばれる。この刺激を受けると、巨大な〈データベース〉である脳は、膨大な知識や記憶の蓄積の中からこれに適合すると思われるものを探し出し、その結果を送り出す。こうした方向の情報処理は〈下降型処理〉・〈概念駆動型処理〉と呼ばれる。前者は部分から全体へ向かう方向で「個々の表現の意味を入力し、理解していく過程」(甲田, p.6)である。これに対して、後者は全体から部分に向かって「高次の水準にある概念や理論から駆動され、入力データを予想や仮設、期待などのもとに処理していく」(甲田, p.7)過程である。この両方向の情報処理の相互作用のなかで、我々は対象が何であるかを〈理解〉するのである。

したがって、そこにあるものが何であるかは、対象自体の問題のみならず、見る者がどのような既有知識を持ち合わせ、どのような状況の中でこれを見るかなどによって変わってくる。こうした意味で、見る者は自らを対象に投影してこれを理解する。したがって、同じものを見ても、その見え方、すなわち〈読み方〉は各個人によって、また同一人でもその時々でさまざまに変化する。

次にこれは何に見えるであろうか。

図2

505

(Westhoff G. J., p. 38)

これ自体も多義的な〈インクのしみ〉である。しかし何らかの数値に関連してこれが現れれば、読み手は〈505〉と読むであろう。そしてこれがかつての海難事故を報ずる記事で、〈右舷の破孔から大量に浸水し…、通信長は…〉といった脈絡の中にある場合には、一般に〈SOS〉という救難信号として理解されるであろう。

1.2. スキーマ

今度は次の文を読んでみてほしい。

図3

だ
わ
の
ゆ
び
わ
?

(波多野, p. 107)

多くの諸君はほぼ自動的に〈誰の指輪?〉と読んだと思う。それは諸君が一瞬でこの文字列の全体を見渡して理解したからである。しかしこれは〈誤読〉

である。今度は一字ずつよく見て読んでほしい。二番目と最後の文字の形は同じである。〈れ〉と〈わ〉は類似しているが、向かって右半分の形を変えることによってそれぞれ〈れ〉と〈わ〉に差異化されている。したがって両者が弁別できない文字を含むこの文は本来は読めないはずである。それをほぼ自動的に読んでしまったのは、諸君が十分に身につけている日本語についての知識構造によって、〈だれのゆびわ〉はありえても、〈だわのゆびれ〉などと読んで意味をなさないと判断したからである。

このような知識構造は広く〈スキーマ (schema = 図式)〉と呼ばれる。スキーマとは、それぞれの個別性を超越した標準的、模範的な知識構造、すなわちある物事についての「知識のひな形である心的構造」(甲田, p. 22)である。その中でも特に、文字や綴り、語彙、文法などの言語にかかわるスキーマは〈形式スキーマ〉と呼ばれる(谷口, pp. 15-16)。〈れ〉という文字にも各個人の書き癖や活字の種類などによって多様な個別の変異体がある。スキーマとはこうした個体差のかなたに想定される〈標準的字体〉を指すものである。したがって読めないはずのこの文字列が読めてしまうのは、一字ずつ目で読んでいても、無意識のうちに日本語についての形式スキーマに基づいて全体を一まとまりとして整合させながら頭で読んでいるからである。しかし問題はそれだけではない。

今度は次の英文を一読して、何について述べているか考えてみてほしい。

“The procedure is actually quite simple. First you arrange things into different groups. Of course, one pile may be sufficient depending on how much there is to do. If you have to go somewhere else due to lack of facilities that is the next step, otherwise you are pretty well set. It is important not to overdo things. That is, it is better to do too few things at once than too many. In the short run this may not seem important but

complications can easily arise. A mistake can be expensive as well. At first the whole procedure will seem complicated. Soon, however, it will become just another facet of life. It is difficult to foresee any end to the necessity for this task in the immediate future, but then one never can tell. After the procedure is completed one arranges the materials into different groups again. Then they can be put into their appropriate places. Eventually they will be used once more and the whole cycle will then have to be repeated. However, that is part of life.” (Bransford J. D. and Johnson M. K. p. 400)

いかがであろうか。各文は短く、語彙も文法も平易なので、諸君にとって難しいテキストではないと思う。それでも霧の中で何かを見るように、内容がぼんやりとして、いま一つははっきりしないという諸君が多いことと思う。それはやはりこれが英語という外国語だからであろうか。日本語ならばその豊富なく形式スキーマで難なく分かるであろうか。

その手順はまったく簡単です。まずものをいくつかの山に分けます。もちろんその全体量によっては、一山で十分でしょう。もし次の段階に必要な設備がないためどこか他の場所へ移動する場合を除いては、準備完了です。一度に沢山やりすぎないことが大切です。沢山にしすぎるより、少なすぎるほうがましです。すぐにはこの重要さがわからないかもしれませんが、めんどろなことになるやすいのです。こうしないと、高くつくことにもなります。最初はこうした手順は複雑に思えるでしょう。でもすぐそれは生活の一部になってしまうでしょう。近い将来にこの作業の必要性がなくなると予見することは困難です。いえ、なくなるといえる人はいないでしょう。その手順が完了したら、その材料をいくつかの山にまた分けます。

それから、それぞれ適切な場所におかれます。そしてそれらはもう一度使われ、またこの全サイクルがくりかえされるのです。とにかく、それは生活の一部なのです (波多野, p. 123)。

これでもまだ内容が漠然として、何のことが判然としない諸君が多いと思う。筆者も初めてこの文を読んだときはそうであった。そこで次に註(3)でこのテキストの題目を見たうえで、もう一度英文を通読してほしい。いかがであろうか。

今回はおそらく一つ一つの語や文の内容が鮮明となり、互いの関係も把握でき、全体が整合的な像を結んだことと思う。ここで重要なのは、最初に読んで分からなかったのは、もっぱら上昇型処理に依存して理解しようとしていたからだということである。テキストは個々の語や文の単純な算術的合計の結果として理解されるのではない。テキストの理解に不可欠なのは、語や文といった「個々の要素の理解とともに、その要素によって整合性のある全体像が構築されなければならない」(甲田, p. 7)ということである。そこで必要なのが〈内容スキーマ〉による下降型処理である。

内容スキーマとは、テキストの内容に関連する標準的、一般的な知識構造である (谷口, p. 15)。洗濯のしかたは、個人の流儀や洗濯物の内容などによってさまざまである。しかしその内容スキーマは、〈洗濯には、水、石鹼／洗剤、たらい／バケツ／洗濯機などを使い、洗ったら絞る、次にすすぎ、また絞ったうえでどこかに干し、乾いたら取り入れてたんすなどにしまう〉といったその大きな流れ、ないしは概要である。そこで、この〈衣類の洗濯〉という内容スキーマが明らかになることによって下降型処理が活性化され、上昇型処理との相互作用の中で各部分や全体との間で〈つじつま合わせ〉がしやすくなり、そこに〈理解〉が生まれたのである。

それでは内容スキーマが明らかになると、なぜ文章が理解できるのであろう

か。それはまさにことばは言語的知識だけで理解されるのではなく、その内容に関する知識と表裏一体であるからにほかならない。すなわち、個々の語や文が内容スキーマに牽引される形で互いに有機的に関係づけられることによって、部分と全体が整合し、そこにテキストとしての結束性が成立するのである。したがって、内容についてよく知っていることなら、たとえ外国語でも一般にわかりやすいのは、豊かな内容スキーマによって個々の形式スキーマの間に関係性が生まれやすいからである。要するに我々は、ことばを狭義のことばだけで読んでいるのではなく、内容的知識とのつじつまを考えながら読んでいるのである。

以上に見たように、〈ことばの理解〉は、言語的知識と非言語的知識の双方にわたって展開される巨大な情報処理プロセスである。したがって読解力を育成するためには、やみくもに語彙や文法といった〈モノ〉としてのことばの強化だけを図ればよいというものではない。これに加えて必要なのは、既存の内容的知識を適切に活用することによって言語的知識との相関を図る〈コト〉的能力である。

1.3. ことばと全体的脈絡

大件垃圾

今度は中国語である。これはどのような意味であろうか。後半の二字はなじみがないものの、前半は我々もよく知っている文字である。わからなければ、この文字を〈読みてしままむの必読の信念〉でじっとにらみ続けていれば、いずれ分かる日が訪れるであろうか。その自信がなければ、次の図4を見てほしい。向かって左側三分の一が小冊子の表紙で、残りの三分の二が本文である。〈大件垃圾〉はこうした脈絡の中で用いられている。

図 4

新宿區廢物利用推行手冊

大家來利用廢物

大件垃圾

清潔事務所的垃圾車來回收 (一個自約2次)

● 大件垃圾的回收採申請制。
(須費用)

① 向當地的清潔事務所申請回收。
(量多時請即早連絡)

② 於指定日將垃圾置於家前(一樓)

詳細情形請向清潔事務所詢問。
或外國人語詢窗口詢問。

如 家具 電器製品等 棉被



新宿區清潔事務所	電話: 9000-2023	星期一至五 9時~17時
新宿區清潔事務所	電話: 3333-8471	星期一至五 9時~17時
外國人語詢窗口 (英語)	電話: 53221-5060	星期一至五 9時30分~12時、13時~16時
(中國語)	電話: 53221-5070	星期一至五 9時30分~12時、13時~16時
(韓國語)	電話: 53221-5070	星期一至五 9時30分~12時、13時~16時
	電話: 53221-5080	




(新宿區廢物利用推行手冊・表紙+p.9.10)

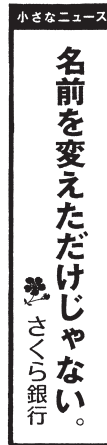
多くの諸君は全体をざっと見ただけで、すぐにこれが〈大型ごみ〉を表すことが理解できたであろう。ここで注目してほしいのは、それだけでは分からなかったことばが、全体の脈絡の中に置いたとたんに分かったことである。このことは、ことばの意味は、それ単独としてではなく、テキストを構成する他の語や文、あるいは絵や図などとの関係に支えられて成立していることを物語っている。テキストとはまさに〈織物〉である。

中国語は日本では使わない漢字や簡略字体も使用する、それでも、断片的にせよ中国語が往々にして〈読める〉のは、われわれはことばを内容的側面からも同時に理解しようとしているからである。この場合で言えば、日本におけるごみの捨て方について、各自治体ごとの個別的な方式を超越した〈内容スキーマ〉を諸君が持ち合わせているからである。これによって、〈廃物〉、〈清潔事務所〉、〈申請制〉、〈垃圾車来回収〉といった究極的には〈インクのしみ〉にすぎない文字列が何を意味しているかが推測でき、これらを手掛かりに、上昇型処理と下降型処理の相互作用の中で、〈大件垃圾〉を〈大型ごみ〉と同定しているのである。〈インクのしみ〉の解釈について述べたように、人間は与えられた情報をそのまま受け入れているわけではない。人間にはこれを自らの既存知識に基づいて整序し、そこに秩序と関係性を作り出し、自分が理解可能な形にしないではいられないという性癖があることを想起されたい。

1. 4. ことばと解釈

次のテキストはどのような意味であろうか。まずは舞台俳優になったつもりで、観客が耳で聞いただけでその内容が分かるように、メリハリをつけて大きな声で読んでみてほしい。もう少し具体的に言うと、このテキストには少なくとも二通りの読み方が可能である。これを考えてほしい。

図 5



(スポーツニッポン1992年9月23日)

1990年に〈太陽神戸銀行〉と〈三井銀行〉が合併して〈太陽神戸三井銀行〉が誕生した。この名称を1992年に変更してできたのが〈さくら銀行〉である。このテキストはその時の新聞広告である。

まず第一の読みは、新銀行誕生にあたって〈銀行の名前を変えただけでなく、中身も変えた!〉という〈決意表明〉である。もう一つの読みは〈中身は変わっていないのに、名前を変えただけではないか!〉という〈揶揄〉である。さて、それではどちらが〈正しい〉のであろうか。もとより新しい銀行が誕生したのであるから、〈名前だけではなく、中身も変わった〉と読むのが〈あたりまえ〉なのかもしれない。しかしその絶対の証拠があるだろうか。同様に〈揶揄〉にもこれを決定づけるものはない。そのように考えると、どちらの読みでもよいということになる。

それではこの広告を作った文案家に尋ねれば、どちらが正しいか決着がつくであろうか。文案家が仮に前者の意味内容を込めて書いたとしても、あるいは後者だとしてもそれはそれであり、あくまでも〈参考意見〉にすぎない。作者

がどのような意図をもって、どのような意味を盛り込んでテキストを書いたとしても、それは公開された瞬間に作者の手を離れる。いわゆる「作者の死」(バルト, p. 89)である。こうして独立し、浮遊するテキストに意味を付与するのは読み手である。読み手が当該のテキストをどのように解釈するかによってその意味内容が決まってくる。そこで諸君がこれを決意表明と読めば決意表明であるし、揶揄と読めば揶揄である。

これはふざけた話のように聞こえるかもしれない。しかしテキストを読む際に決定的に重要なことである。図1のインクのしみが何に見えるかという問題と根本は同じである。テキストの意味内容は、作者のみが決定するものではない。作者が織り上げて差し出すことばを、読み手は自らの立場で解釈し、両者の相互作用の中からそれは構成的に作り上げられる。したがってこのテキストの前後にさらにテキストがあれば、その脈絡が解釈に大きく影響することは言うまでもない。

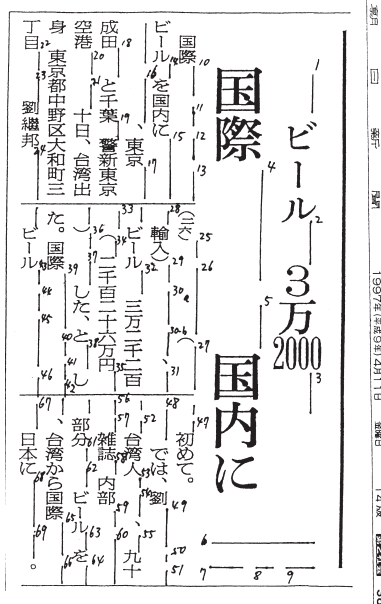
1.5. 未知の語彙とテキスト内容の把握

次に、図6のテキストにざっと目を通したうえで、記事の概要を〈5W1H〉に基づいて把握してみしてほしい。空所をすべて埋める必要はない。番号は単に説明時の便宜のために付したものである。

空所の個所に本来あったのは、もしこの記事がドイツ語で書かれていたら、諸君がおそらく知らないと考えられる語や表現である。逆に言うと、諸君が分かりそうなもののみを残した。

多くの空所、すなわち未知の語彙にもかかわらず、概要は容易に把握できよう。それは、これまでに見てきたように、与えられた言語的情報を手掛かりとして、これに関係する内容的知識を活用しながら諸君が無意識のうちに物語を書きってしまうからである。このように、すべての語彙や表現が分からなくとも、テキストの理解は必ずしも不可能ではない。この点に注目してほしい。

図6



(朝日新聞1997年4月11日をもとに原口が教材化)

解答例は次のとおりである。

いつ：1997年4月10日

どこで：成田、成田空港

誰が：劉繼邦（台湾出身） どうした：逮捕された（らしい）

何を：ビールがらみの何か

なぜ：何らかの不正行為，密輸（？）で

どのように：？

全体を読むと，細部は不詳でも〈警察〉という語の存在などから，そこはか

となく犯罪の匂が漂ってくる。そもそも合法的な商取引などなら〈第2社会〉面に掲載されることはないであろう。そこで一歩突っ込んで、〈どのように〉、すなわち犯行の〈手口〉を考えてみてほしい。ヒントとなるのは、空所1, 2, 3はどのような語かということである。また空所55~64あたりについても併せて考えてみてほしい。授業では多くの諸君はほぼ反射的に、2は〈瓶〉ないしは〈缶〉, 3は〈本〉だと答える。しかしそうであろうか。他人と同じことを考えていたのでは、金儲けはできない。こうした場合には犯人の立場に身を置き、自分ならどうするかを考えてみるのがよい。諸君はビール関係の何かを不正にどうにかしようとして、台湾あたりから飛行機でやってきて成田で逮捕されたのであろう。3万2000というのはその量のようなものである。一体何をどうしようとしたのであろうか。

それでも分からない諸君は、3万2000が〈本〉あるいは〈缶〉であるとしたら、一体どのくらいの量になるか想像してみてほしい。仮に350ml缶だとすると、その重量は約11トン、24本入りで1300箱を超える巨大な量である。一人ないしは数人で持ち込むのは物理的に不可能である。密輸に好適なのは、隠しやすいように小型軽量で高価なものである。

原文は註(4)を見てほしい。要するに偽造ビール券を雑誌の内部をくりぬいて作った空間に隠して持ち込もうとしたのである。それにしても90冊というのは大量である。具体的にどのような形状の雑誌をどのようにして持ち込もうとしたのであろうか。興味あるところである。

1. 6. 総力戦としての読解

上に見たように、われわれは言語的欠落があってもある程度テキストの内容を理解することができる。またその内容の解釈には多様な可能性が開かれている。これは読むということが、作者の書いたことばを、いわばそのまま丸呑みにするような行為ではないからである。まさに「読むということはテキストか

らの信号及び指示と、既有知識との間の相互作用として特徴づけられる」(Westhoff 1997, p. 51) ののである。すなわちテキストから得た情報と読み手の持つさまざまな既有知識との相互作用の中から何らかの整合的世界を作り上げようとする能動的意味構成作業が〈読む〉ということである。こうした意味において〈読む〉ことは〈書く〉ことである。そうであればこそ、初めて見る未知の文字で書かれた中国語も、虫食いテキストの概要も理解できるのである。

以上のことから、読むということは言語的知識だけではなく、ありとあらゆる非言語的知識も動員して行われるという意味で、〈総力戦〉に例えることができよう。総力戦とは、軍人と軍隊のみが戦争を遂行するのではなく、背後の民間人や産業など、その国のもてるすべてを戦力化し、一体となって戦うことである。イギリスはアメリカ海軍と共に、数学者や統計学者などの助けを借りて輸送船団の運航と護衛方式の改善を図り、大きな成果を挙げた。アメリカは宣伝ビラの作成に、画家や心理学者、言語学者なども動員した。また対日戦闘を有利に進めるために、日本語を専門とする下士官、将校を急速養成し、文化人類学者に日本文化の研究を委託したことは有名である。このように米軍は総合戦力という考え方を重視した。アメリカ海軍の Nimitz 大将は次のように述べている。

海軍力とはあらゆる兵器、あらゆる技術の総合力である。戦艦や航空機や上陸部隊、商船隊のみならず、港も鉄道も、農家の牛も、海軍力に含まれる (戸部, p. 320)。

これを読解にあてはめるなら、次のように言えよう：

読解力とはあらゆる言語的知識、あらゆる非言語的知識の総合力である。文法や語彙や造語法、テキスト構造についての知識のみならず、専門的知

識も一般常識も、日々の生活体験も、読解力に含まれる。

このように読解力とは総合的理解能力である。したがって、世界知識やテキスト内容に関する知識等を活用してテキスト理解を追求することは、読解の邪道ではなく、必然である。場合によっては、〈つまらぬ〉雑学的知識や、日々の生活体験なども貴重な読解戦力である。

2. 読解と読解学習の戦略

テキストを適切に読み、読解力を効果的に育成するためには、これまでに見てきたような〈読解の理〉に関する知見の援用が不可欠である。そのためには問題を〈戦略〉と〈戦術〉の二段階に整理して考えると分かりやすい。

2.1. 戦略と戦術

昨今は〈戦略〉ばかりである。〈経営戦略〉をはじめとして、〈就活の戦略〉、そして〈合コンの戦略〉などというものさえある。戦略 (Strategie) とは〈一定の目的の達成に必要な長期的かつ大局的、総合的な構想、計画性〉を意味する。何かを始めるにあたってこれをまず考えようというのは正しい。しかし同時に忘れてならないのは、〈戦略〉を実現するためには、これを支える地道な〈戦術 (Taktik)〉が不可欠だということである。川田・大島は戦術を次のように定義している。

①戦略にもとづき、その指示、命令、計画に従い、実行にあたる手段とその運用術で、②おもに後天的な教育、訓練、経験により習得する知識、技術と実行力を指し、③相対的に短期、局地、特定の任務遂行に必要な術策をいう (川田・大島, p. 374)。

両者は必ずしも截然と分けられるものではない。しかし要は、〈戦略〉が目的へ至る大まかな考え方や段取り、計画であるのに対して、〈戦術〉はこれを実現するための具体的手段や方法、戦法だということである。目的に対して適合する手段の手持ちと活用がなければ、どんな立派な戦略も〈絵に描いた餅〉にすぎない。こうした意味で経営にせよ合コンにせよ、目的を達成するためには適切な戦術が不可欠である。

目的と手段とは正しく適合していなければならない。「目的はパリ、目標はフランス軍」といわれるのは、この関係を表わすものである（戸部，p. 269）。

さらに「本来、戦術の失敗は戦闘で補うことはできず、戦略の失敗は戦術で補うことはできない」（戸部，p. 291）ことにも注意する必要がある。これらのことは軍事作戦のみならず、一般社会で広く何かを計画し、実行しようとする際にも不可欠である。このような意味において、テキストをどのようにして理解し、読解力をいかに形成するかということもまた一つの〈オペレーション（Operation）〉として考える必要がある。

2.2. 読解の戦略

外国語を学ぶ目的はさまざまである。その言語圏の社会や文化について知る、見識を高める、あるいは人格の向上などが挙げられることもある。しかしこれらは外国語を学ぶ以外の方法でも達成が可能である。これに対して、外国語を学ぶことでしか到達できない正面の目標は、通訳や翻訳を介することなくやり取りができる〈直接交渉能力〉の形成である。したがって読解の戦略目標は〈テキスト内容を自力で理解すること〉だといえよう。そしてその実現を図

る戦術的必要から、語彙を学び、文法を学ぶのである。言語の研究者が語彙や文法を研究するのは目的である。しかしテキストの理解を目標とする諸君が語彙や文法を学ぶのは目的ではなく、あくまでも手段、すなわち戦術としてである。しかし日本では、手段といえどもおろそかにしない〈ガンバリズム〉のもと、その習得に夢中になるあまり、ともすれば〈何のために?〉という当初の目的がぼやけることが少なくない。その結果生まれるのが〈手段の自己目的化〉という倒錯である。あくまでも戦略あつての戦術である。誤解がないようにあえて強調しておく。

上に見たように、テキストは〈モノ〉としての言語的知識を身につけさえすれば読めるというものではない。同時に必要なのは、内容や背景などについての非言語的知識や判断力などを生かす〈コト〉的能力である。母語の日本語で何かを読む場合でも、内容や背景についてよく知っているテキストは一般に読みやすく、そうでないものは理解しにくいという落差が見られる。そこで言語的知識が十分ではない者が外国語のテキストを読むに際して必要なのは、その不足を非言語的知識によっていかに埋め合わせるかである。上にも述べたように、これは読解の邪道ではなく、必然である。要はテキストの内容が分かればよいのである。したがってこの点を加味するならば、読解の戦略目標は、〈持つ言語的知識と非言語的知識を総動員して、テキスト内容の理解を達成すること〉であると言えよう。

2. 3. 読解学習の戦略

外国語の勉強、特に読むことは、まず語彙や文法といった言語的知識を学び、これをもとにテキストを読み、何らかの有用な知識を獲得するという順序で行われるのが一般的である。これは〈ことばから知識へ〉という方向性である。しかし読解学習の戦略という観点から同時に必要なのは、内容的知識などを援用しつつテキストを読み進める中から、語彙をはじめとした言語的知識を自力

で獲得してゆく〈知識からことばへ〉という方向性の勉強である。なぜならば、外国語の運用能力形成に最適なものは、使用の現場だからである。読むことに關してその宝庫はテキストそれ自体である。したがって、必要なものをそこから帰納的に学びとる能力こそが成否を分ける。とりわけ生活や仕事を抱える社会人が読解能力を形成しようとした場合、悠長に教室で語彙や文法についての教えを乞うている余裕はない。そこで求められるのは、必要なものを読む中から、言語的知識を自力で獲得して進む能力である。

こうした方向性は、読解能力の能率的形成に向けた技術的観点からも、不可欠である。読解能力の形成には大量に読むことが必要である。しかし言語的能力、特に語彙がまだ乏しい初歩的学習者にとってこれはなかなか困難である。そこで必要なのは、非言語的知識を援用しながらとりあえず読み始め、その中で獲得したことばを戦力として読解作業に投入しながら進むことである。これによって、未知の語彙は少しずつ減少し、テキストの理解は容易となる。そこで、読む速度が上がることによって早く大量に読めるようになり、その結果さらに読解能力が向上するという「読解におけるマシユー効果」(Stanovich, p. 380) が作動する。要は語彙や文法の勉強と読解を別々に行うのではなく、両者を一体化し、循環させることである。この点について、関口は次のように指摘している。

英語のテキストは和英辞典

[...] 雑誌の中の環境問題についての記事を読んだあとで、学生たちに自分の意見を書かせると、あわてて和独辞典を引き始める。今テキストを読み終えたばかりで、皆その内容とドイツ語を十分に理解しているののである。それなら、何故そのテキストの中から必要な表現をさがそうとしないのだろうか(関口, pp. 164-165)。

関口のことばをもじって言えば、〈独語のテキストは独和辞典〉である。〈新しいテキストを既読テキストで読む〉ことを心がけてほしい。

2. 4. 何を読むか

読解の最大の推進力は、テキスト内容に対する関心である。また、よく知っている内容に関するテキストは一般に読みやすい。そこで諸君に勧めるのは〈特定領域集中型読解法〉である。これは、自分が関心があり、内容的に詳しい分野のテキストを対象を絞って集中的に読み進める方法である。そこではまず内容的知識の支援が期待できる。また当然のことながら、サッカー、料理、音楽、人口問題、食糧問題などそれぞれの分野には、そこでよく使われる語彙や表現がある。こうした分野固有語彙は、通常その分野のテキストの理解にとって重要性が高いうえに、頻出することによる〈繰り返し効果〉によって習得もしやすい。そしてこれが分かることによって、他の一般的語彙の推測なども容易となり、上に述べた〈読解におけるマッシュ効果〉にとって有利な条件が整う。

こうした事情から、料理が好きな諸君はレシピなどを読むのがよいであろう。事の性格上、使用される語彙や表現の範囲は狭い。hacken（みじん切りにする）、Hackfleisch（ひき肉）、Käse（チーズ）、Zucker（砂糖）、zum Kochen bringen（ゆでる／煮る）などが繰り返し現れる。また文も一般に短く簡潔である。なじみのある料理について書かれたものは特に理解しやすい。そこで、日本料理の作り方をドイツ語で説明した本をまず読むことを勧める。まさに〈知識からことばへ〉である。ここで料理関係の語彙や表現をある程度蓄積する。次の段階では、こうして仕込んだ言語的知識を生かして、未知の料理に挑む。このような段階を経ることによって、難度の上昇は緩和され、言語的負担は軽減される。そして本を選ぶに際しては、出来上がりの写真が付いているものがよいであろう。なぜならば、出来上がりかどのようなものかを注視

点とすることによって、これに向かって内容スキーマが活性化し、そこへ至る道筋の見当がつけやすくなるからである。

また日本料理に限らず、日本旅行のためのガイドブック、日本関係の報道記事など日本について書かれたものは、同様の理由から、一般に読みやすいのでお勧めする。

2. 5. 個人的体験

筆者が大学を休学してドイツ遊学に出かけたのは、ドイツ語を始めてから4年が過ぎたところであった。最後の年は資金作りのアルバイトでドイツ語はほとんどできなかったのも、実質3年である。住んでいた学生寮に Kölner Stadtanzeiger というケルンの一般市民が読む新聞があったので、これを読もうとしたが、歯が立たなかった。しかしたまに掲載される日本関係の記事は、それでも少しは分かりやすかった。やはり内容的知識に助けられたからだと思う。

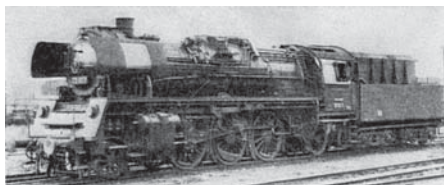
そこで同紙はあきらめて、今度は Expreß, や Bild という、日本のスポーツ紙や夕刊フジなどに相当する大衆紙を読んでみた。主な内容はサッカー、芸能、各種事件、事故などで、大きな写真や見出しに対して本文は僅かというものである。サッカーと芸能には関心がなかったのも、事件、事故関係の記事を中心に読んだ。内容スキーマが日本のこの手の記事とほとんど同じである上に、語彙や表現は単純で、文も短く、これは読みやすかった。Verkehrsunfall (交通事故), zusammenstoßen (激しく衝突する), ums Leben kommen (死亡する), schwer verletzt (重傷の), Seitensprung (浮気), Eifersucht (嫉妬), erstechen (刺殺する), などということばは毎日のようにお目にかかるので、すぐに覚えてしまった。そのうちに、この手の記事ならかなり楽に読めるようになった。これでおそらく読むうえでの文法の生かし方、文成分(文を構成する語や語群)の把握、言語的知識と非言語的知識の相関・推測といった読解の基本技能がある程度体得できたのだと思う。また読み慣れるとともに〈事件・

事故関係基本語彙〉ではない〈一般基本語彙〉も少しずつ増えていった。そのうちに Kölner Stadtanzeiger も、事件、事故関係の記事から入って、簡単な記事なら少しずつ読めるようになっていった。

筆者がドイツで最初買った〈原書〉はドイツの蒸気機関車に関する小さな文庫版の本であった。それはドイツの蒸気機関車にはどのようなものがあるかに関心があったからである。書店で書棚を見ていると話しかけてきた同じく鉄道好きのドイツ人に〈まず最初はこれがよい〉と勧められて購入した。それま

図 7

PERSONENZUGLOKOMOTIVEN

Baureihe 23^{1a} (Neubau DR)

Bauart	1'C 1' h2	Rostfläche	3,71 m ²
Treib- u. Kuppelrad-φ	1750 mm	Verdampfungsheizfl.	159,60 m ²
Lauf-φ vorn	1000 mm	Überhitzerheizfläche	68,50 m ²
Lauf-φ hinten	1250 mm	Zylinder-φ	550 mm
Länge über Puffer	22 660 mm	Kolbenhub	660 mm
Höchstgeschwindigkeit	110 km/h	Achslast max.	17,8 Mp
Leistung	1700 PSi	Lokreibungslast	53,4 Mp
Kesselüberdruck	16 kp/cm ²	Lokdienstlast	84,0 Mp

Erstes Baujahr 1955

Tender: 2'2' T 28

Nach der Deutschen Bundesbahn griff auch die Deutsche Reichsbahn den Bau einer Personenzuglokomotive auf, die sich auf die Entwürfe der alten Baureihe 23 stützte. Man übernahm jedoch auch nur die Abmessungen für das Trieb- und Laufwerk, ansonsten aber machte man sich die modernen Baugrundsätze zunutze. Die neuen Kessel erhielten eine Verbrennungskammer und Knorr-Mischvorwärmer. Ab der Betriebsnummer 23 1003 entfiel dann auch der noch ursprünglich auf dem Kessel sitzende Speisedom. Zahlreiche Neuerungen weisen auch die geräumigen Führerhäuser auf. Zum Schutz des Lokomotivpersonals sah man eine Tenderstirnwand vor. Insgesamt stellte die Deutsche Reichsbahn 113 Lokomotiven in Dienst, die auch im leichten bis mittelschweren Schnellzugdienst eingesetzt werden.

Betriebsnummern: 23 1001-1113

79

(Obermayer H. J., p. 79)

で日本語で日本の蒸気機関車について読んで知っていたことが役にたった。図7のように、この本は一頁に一形式を取りあげ、写真に続いて機関車の寸法や性能などが一覧表にまとめられ、本文は量が少ない上に簡潔であったことも読みやすかった一因だと思う。Windleitblech (除煙板), Treibrad (動輪), Achslast (軸重), Kesselüberdruck (ボイラー圧力), ausmustern (廃車にする) などといった語彙は辞書を引かずとも、文脈や数値などからおおよそ見当がついておもしろかったことを覚えている。なお〈やかん〉が Kessel であることは知っていたが、ドイツ語ではボイラーも同じであることをここで知った。共に〈湯沸し〉であり、なるほどと思った。

テレビを見てもラジオを聞いても、最初は速すぎて、ほとんど聞き取れなかった。こうした中で、最初に聞き取れるようになったのは天気予報である。低気圧がくれば天気は悪化し、陽が照れば気温は上がり、曇れば下がるといった内容スキーマはどこでも同じである。これに加えて Hoch (druck) (高気圧), bewölkt (曇り), zeitweise Regen (一時雨), Höchsttemperatur (最高気温) といった一定範囲内のことばが毎回繰り返され、それが一日に何度も放送される。おまけにテレビ画面には天気図という視覚情報まで出てくる。初心者にとっては最高の学習条件である。新聞などの気象関係の記事も併せて読むと、学習効果は更に上がる。

また手帳くらいの小さなノートを持ち歩き、有用な語や表現を見たり、聞いたりすると、これを書きとめ、後に辞書で調べるなどしたうえで、今度は自分が使用するようになっていた。まさにことばの使用現場が最高の教室である。

3. ドイツ語読解の戦術

上に述べたような大まかな読解と読解学習の戦略を実現するためには、これを支える戦術的技能や方法が必要である。本手引きではこれを〈概要把握〉、

〈文法〉, 〈語彙〉の三分野に大別する。今回取り上げるのは, 〈概要把握〉である。これはテキストを理解するための第一歩として不可欠の戦術である。

3. 1. 理解の第一歩としての概要把握

〈衣類の洗濯〉についてのテキストで見たように, まず全体についての見当がつかないなければ細部の理解は困難である。そこでまず全体の概要を把握することが, テキストを適切に理解するための戦術的第一歩である。本の表題や目次, 見出し, 動物園や遊園地などの入り口に設置されている園内の案内図などもそのためである。

3. 1. 1. 訳読よりもまず概要の把握を

日本は世界に冠たる翻訳大国である。そのせいか, 授業で次のような雑誌記事を配付し, 筆者が音読するのを聞きながら黙読させうえて, 「何があったのか, 簡単に日本語で言ってほしい」と求めると, 多くの学生諸君は本文を最初から一語ずつ訳し始める。その結果, *bislang* (これまで), *glorreich* (栄光に満ちた), *Altersheim* (老人ホーム), *Herzversagen* (心不全) といった未知の語彙や, 関係代名詞構文などに足をとられて立往生するのが常である。そこでまず注意してほしいのは, 〈内容を言う〉ということは全文を訳すことではないということである。

Älteste Japanerin gestorben

Tase Matsunaga (geb. 1884), die bislang älteste Frau Japans, starb im Dezember letzten Jahres im glorreichen Alter von 114 Jahren in einem Altersheim in Tokyo an Herzversagen.

Damit rückte Yasu Akino aus Sagara (Präf. Shizuoka) mit ebenfalls stolzen 113 Jahren auf Platz eins der Altersliste. (JAPAN magazin 1999年2

月号 p. 6)

最高齢の日本人女性が死亡

これまで日本で女性の最高齢者であったマツナガ タセさん（1884年生まれ）が昨年12月に、東京の老人ホームで心不全のため、114歳という輝かしい年齢で亡くなった。

これによって相良（静岡県）出身のアキノ ヤスさんが、同様に誇るに足る113歳で年齢順位表の第一位に繰り上がった。

訳すこと自体が悪いわけではない。場合によっては厳密な日本語訳が必要とされる場合もある。文構造が込み入った箇所などを正確に理解するために訳読は有効な戦術である。しかしドイツ語ができない知人に、〈この記事には何が書いてあるの？〉と聞かれたら、冒頭から全文を訳すであろうか。全体をざっと見て、完全には理解できないまでも、とりあえず〈誰かが亡くなったらしい〉、あるいは〈114歳の人がどうかと書いてあるようだ〉といった答え方をするであろう。それでひとまずよいのである。そして〈誰かってだれ？〉、〈そんな高齢の人がどうしたの？〉と問われれば、更に詳しく読むであろう。これが普通の行動というものである。

このテキストで最も重要なのは〈日本で最高齢だった114歳の人物が亡くなった〉ということである。これに若干補足すると〈日本で最高齢だった114歳の女性が亡くなり、現在の最高齢者は113歳である〉ということである。このような報道記事の目的は〈5W1H〉を読者に伝えることである。その中で最も重要なのは〈何がどうした〉ということである。これこそがテキストの核心である。これをまずつかみ、自分のことばで伝えることが〈何があったのか日本語で言う〉ということである。ご本人には失礼であるが、114歳という年齢が輝かしいということや、どこでどのような原因で亡くなったかは、一般の

読者である我々にとっては副次的な問題である。

こうした中で救いなのは、全文訳に挫折した諸君の多くも、こちらから聞いてゆくと、〈日本で最高齢の人が亡くなって、その人は114歳だった〉ということはおおよそ理解できているらしいことである。これがまず分かればよいのである。自信をもってほしい。要は、諸君がテキストを読むことの戦略目標は、訳すことではなく、内容を把握することである。そのための第一歩はテキストの概要、特に〈何がどうした〉をまずつかむことである。細部の理解はそれからのことである。訳すことは内容を理解するに際しての一つの戦術的選択肢にすぎない。

3. 1. 2. 表題・見出しによって内容スキーマの活性化を

諸君の行動についてもう一つ問題であるのは、全文訳するにせよ、しばしば表題や見出しをとばして、いきなり本文から始めることである。あるいは〈表題も訳すんですか?〉という〈間抜けな〉質問が出ることもある。

新聞や雑誌の記事などの場合、テキストに含まれる情報の核心は、一般に表題や見出しという形で冒頭に大書される。「仙台空港を民間委託へ 宮城県、国と協議方針」(朝日新聞2011年12月11日13版5面)、「眠る機械 被災地へ日商呼び掛け、全国から無償支援」(同)、「中国、輸出の伸び鈍化 3カ月連続 11月、2.1ポイント下がる」(同)といったものである。先ほどのテキストでは〈最高齢の日本人女性が死亡〉ということである。このように、見出しとはテキスト内容の精髓である。それぞれのテキストはみな内容的に異なり、必要とされる知識や読み手の構えなども異なる。そうであればこそ、見出しをまず読むことによって本文を読む態勢が整う。またわれわれは急ぐときには、何が起きたのかをとりあえず知るために、新聞や雑誌の見出しだけを拾い読みする。要するに要約を読むのである。本文だけ読んで、見出しはとばすということとは日常生活では通常ありえない。

しかしこの不思議な現象が教室では頻繁に起こる。それは読解ということが、〈一つ一つの文をお作法どおりに訳す〉ことによって文法や語彙が習得できていることや、未知の語彙はすべて辞書で調べたという勤勉性を証明する「学校課題」⁽⁵⁾として理解されているからではないだろうか。あるいは〈本文についての問題を解くのが読解〉という受験勉強の影響なのだろうか。いずれにせよ、見出しは多くの場合、〈ゲームの対象外〉と認識されているようである。

同じくドイツ語教員である知人は、こうした読み方を「文章を与えると、すぐ頭からつっこんでいきます。私がいつも思うのは、プールに準備体操もシャワーの水で体をならすこともせず、プールにいきなりドボンと飛び込んで、寒い思いをするというイメージです」(筆者宛私信)と評している。同感である。テキストは本文のみならず、表題や見出しも含めて全体として理解すべきものである。その点について、教室の内外の別はない。

上で見た〈衣類の洗濯〉についての英文のことを思い出してほしい。何について書かれているか分からないものは一般に理解が困難である。そこで表題や見出し、あるいはそこに至るまでの話の流れなどから、内容スキーマを活性化させ、下降型処理を活用することがまず重要である。こうした意味で、表題や見出しをとばして読むなどもつてのほかである。問題をわざわざ自分から難しくしているようなものである。

3. 1. 3. まず通読を

テキストは〈織物〉に由来していることから分かるように、各部分は他の部分や全体と関連している。そこでこれを捕捉するために必要なのは、短いテキストなら全体を、長いものであれば一つの段落をまず一度通読し、内容を概観することである。ビール券密輸の記事においても、見出しの〈ビール券〉と最後の方に出てくる〈雑誌の内部をくり抜いて隠す〉という手口が関連している。両者の関係に気付くかどうかで、内容理解の結果は大きく変わる。また後

に文法の戦術のところで述べるように、接続詞やある種の副詞などは、テキストの論理構造の目印である。そこで、weilがあれば、その先には何らかの原因や理由が述べられているはずである。そこでこれを見つけることによって、原因や理由が挙げられている個所を特定することができる。またこれも後に詳しく述べるように、枠構造を見破ることは、意味的なまとまりによる文の切れ目を把握し、長文をいくつかの短文に分解する上で重要な手掛かりとなる。また多くは分からない場合でも、わずかでも分かるところを見つければ、これは全体を攻略するうえでの足掛かりとなる。

かつて筆者は執筆中の論文の参考文献として、社会心理学に関する比較的長い英語の論文を急いで読む必要に迫られたことがある。筆者は英語が不得意で、成績も悪かったことから、心機一転ドイツ語を始めた人間である。英語を読むのは今でも難事である。ただ救いだったのは、その論文は、以前に読んだ他の論文の中で言及されていたことから、内容についてある程度見当がついたことである。まず最初は、冒頭から辞書を引きつつ、訳読的に読み始めた。しかしこれでは時間的に間に合わないことにすぐに気付いた。そこでどうしても気になる語のみを辞書で引くことにして、とにかく先へ先へと進むことにした。多くの部分は何やらよく分からない。しかしそれでも、ここでは著者がいくつかの研究を紹介しており、その一つに賛意を表明しているらしい、そしてあるところでは because という語から、著者が自らの意見の理由を挙げているらしいといったことは分かった。そして何となくではあるが、重要そうな個所はそれと判別できた。そこには下線を引き、辞書にも少しあたり、ある程度深く理解するようにして進んだ。そしてほとんど最後にたどりついたときに目に入ったのが〈summary〉であった。うかつであった。最後に要約があることを見落としていたのである。そこでこれを読んでもみると、それまでに下線を引いた個所の内容を大体含んでいた。そして、こうして見つけた重要な部分の中で、特に自分が必要とする個所については徹底的に辞書を引いて正確な理解に

努めることによって時間内に目的を達することができた。

通読はいわば空中偵察のようなものである。これによって全体の構造や大まかな内容などを鳥瞰的に知ることが、テキスト理解というオペレーションの出発点である。これをせず、見出しもとばし、何の事前情報もなく、本文を最初から一語ずつ順を追って辞書を引きながら訳してゆくというのは、英霊には失礼ながら、〈敵情不明ナレド攻撃セントス〉の精神のもと、十分な敵情把握もすることなく、大敵にひたすらに白兵突撃を敢行して大きな犠牲を出した旧日本軍同様、無謀というものである。

3. 1. 4. 辞書は少なく引く努力を

このようにしてさまざまに努力しても、すべての未知の語彙の意味内容が楽に推測できるわけではない。むしろ推測できる語彙は少ないのが現実である。したがって辞書の使用は不可避である。しかし、そこで厳に慎むべきなのは、未知の語彙を片端からすべて辞書で引くことである。中学や高校などでは〈手を抜かず、未知の語彙はすべて辞書で調べるように〉という指導を受けたかもしれない。これは中等教育の生徒に対するある種の〈道徳教育〉としてはともかく、読解の指導法としては疑問が残る。とりわけ概要把握を目的として全体を通読するに際しては禁物である。これによって読む速度が落ち、全体にざっと目を通すという戦術的目標が妨害される。

内容理解にとって、各語の重要度は均一ではない。そこで全体を見渡したうえで、内容理解にとって最も重要そうな語、通読時に気になった語などに絞って、まず一語を引く。そしてこれを手掛かりに考える。それでも分からない場合は、次に重要そうな語をもう一つ引いてみる。仮に一文に未知の語彙が五つあるとする。結果的にすべてを辞書で引くことになったとしても、何も考えずに最初から順番にすべてを引くのと、どれが重要かの順位づけを考え、推測しながら引くのとでは大違いである。辞書を引くのは、基本的に推測を支援し、

これを検証するためであると心得てほしい。このようにして、なるべく少数の語を引いて何とか間に合わせる日常の努力が推測能力を鍛え、読解力を形成する。最初これは面倒で、かえって時間と労力を要するかもしれない。しかし慣れるにしたがい、重要な語の判別は容易となる。その結果少しの語を引くだけで、見当がつくようになる。そして次第に読む速度が上がり、早く大量に読めるようになる。

いわば狙撃手の射撃である。狙撃手はむやみに発砲すると自らの所在を暴露し、身を危険にさらすことになる。また一般に狙撃の目的は、敵のすべてを倒すことではなく、一発の射撃で敵にできる限りの打撃を与え、混乱に陥れ、動きを鈍らせることである。そこで一発に最大の効果を発揮させるように全体の中で目標を選択し、必中を期す。通常狙うのは、指揮官あるいは機関銃手など敵の戦力発揮にとって重要な対象である。読解における辞書の引き方も基本的に同じである。テキストの中で重要なのは一般に動詞、名詞、あるいは述語として用いられている語などである。これを全体の関連の中で判別するためにも通読が不可欠である。

記憶は、白紙に何かを書き記すようなことではなく、既有知識で新しい情報を受け止め、両者の間に結びつきを作ることによって行われる。その簡単な例は〈語呂合わせ〉である。これによって電話番号などの無意味な数字の羅列は有意味化され、既有知識との間に関連が生まれることによって覚えやすく、忘れにくくなる。また忘れても、思い出すための手掛かりが多い。したがって語彙の記憶、そして想起についてもこうした〈とっかかり〉が多い方が有利である。〈基本語彙集〉などで、ABC順に並んでいる語を最初から暗記しようとしても一般に困難が大きい。それは語の綴り、発音といった形式スキーマしか記憶の手掛かりがないからである。しかしテキストを読みながら、そこに出てきた語彙を覚える場合には、どのテキストのどのような脈絡の中で出てきたかなどの付随的な情報が記憶とその保持や想起を助ける。こうした点からも、なる

べく辞書を少なく引く努力は、当該の語についてさまざまに推測して考える機会を増やし、その際に生まれる〈エピソード〉が記憶の手助けとなる。また、推測が的中してうれしい、外れて悔しいといった感情もまた記憶に有利に作用する。

こうしてテキストの中で、自分にとって重要な個所を見つけ出し、そこを正確、厳密に理解する場合は、一転して徹底的に辞書を引くことが重要である。その際にはいくつかの辞書を引き比べる必要もある。また正確かつ良い日本語訳が必要な場合には、さらに国語辞典や類語辞典、そして内容に関する事典や関連図書なども参照しなければならない。この段階になると、問題はもはやドイツ語よりも日本語の表現能力や専門的知識である。要は、読み方に応じて辞書の使用法を臨機応変に使い分けることである。

3. 1. 5. 日本語の読解力を

以上のように、テキストの理解にとって、冒頭から一文ずつ訳読する前に、まず全体を見渡して要点を把握することが重要である。早稲田大学教育学部で一・二次生を対象とする〈基礎演習〉を担当してきた室は、日本語の読解について次のように指摘している。長くなるが、重要な点なのであえて引用する。

邦文の比較的わかりやすい論文を読ませて、パラグラフごとにその文意を問う。このパラグラフは何をいっているのか、ここで語られているのは一体何の話なのか。返ってくる答えは、そのパラグラフの端から適当に間引きながら、ズラズラとなぞってくりかえすことなのである。そういうのは、鸚鵡返しとって答えとは見なされない。何をいっているのか、何の話なのか、ズバリ一言でいえというと何もいえなくなって立往生。このズバリ一言を毎週問い続けて半年もすれば、まあ何とか答えられるようになる。しかし、さらに一歩進んで、そのパラグラフの要点を整理して簡潔

に説明するとなると、極めて難儀なことになる。以前はあまりしたおぼえのない、こういう稚拙なやりとりが、最近不可避になったのはなぜだろうか。

否定しようもない明白な原因の一つは、彼らの読書量の急速な収縮にある、それは、もはや読書量の範疇にすら入らない。例えば、本を読む以前に、早稲田の学生で新聞を毎日読む習慣をもっている者がどれくらいいるだろうか。十人に一人いるかいないかというのが、遺憾ながら現状である。〔…〕

〔…〕それよりもむしろいわねばならぬことは、革命的といって過言ではない通信手段をめぐる環境の変化であろう。端的にいえば、インターネットと携帯電話は、情報の伝達に関して画期的利便性を生み出すと同時に、情報の収集に関しては深刻な誤解と混乱をもたらしている。いいかえれば、この新しい技術は、どのような人に対しても必要な情報を瞬時に提供しうるかに思いこまれている節がある。キーワードを駆使して検索機能を作動させれば、たちどころに膨大な情報が手に入る。〔…〕この新技術を操作できさえすれば、自分が知りたいことは、知りたい時にいつでも手に入れることができる。彼らのほとんどが、そう信じて疑わない。だとすれば、新聞を毎日読むなんぞあ、うざったくて考えたくもない。

しかし、検索エンジンを使って大量の情報を集めたからといって、ただ集めただけではそれをもって情報収集とはいえないのである。次々にキーワードを打込んでしまひこんだとしても、その点は変わらない。改めていうまでもなく、情報の収集は、集めた情報素材を解析して初めて成立する。そして解析は、結局は人間の頭脳によってしかなされえない。集められた膨大な情報の中身を吟味し、意味を読みとって選りわけ、整理して初めて、自分が知りたいこと、あるいはその手がかりを手に入れることができる。だから、情報を収集しようとするれば、どうしても文章を読み解く能力が必

要になるのである (室, p. 14)。

ドイツ語の読解力を育成するという立場から見ると、日本語の読解力はそのために利用すべき戦術的一手段ということになる。そこでここで取り上げた。しかし上で指摘されている内容は、ことばの使用と大学における勉学という観点からは一戦術どころではなく、戦略レベルでの根本的大問題である。筆者の意見を〈ズバリ一言〉で言うならば、〈日本語でできないことが、外国語でできるはずがない〉である。日本語であろうと外国語であろうと、ことばをいかに使うかという点では互いに通底している。読解で言えば、上の指摘にもあるような、テキストの核心を把握する能力、要点を整理して簡潔に説明する能力、行間を読み、書かれていないことを推測して補足する能力などは基本的に同じである。したがって諸君のほとんどにとって最も運用能力が高いであろう第一言語の日本語でできないことが、語彙や文法など言語的に不利な条件の大きいドイツ語や英語などで突然できるようになるわけがないのである。

携帯電話のメールなどで、ご機嫌伺いな〈コミュニケーション〉とやらにうつつを抜かしている場合ではない。コミュニケーション能力の根本は〈お愛想〉ではなく、知力である。上の指摘にもあるように、日本語の読書に励み、テキストの主旨を把握し、自分のことばで簡潔、的確に表現するなど日本語を使いこなす経験をぜひ積んでほしい。そしてこれは回り回って外国語の運用能力を強く下支えする。外国語を氷山の目に見える部分だとすると、日本語の実力は水面下の巨大な部分に相当する。急がば回れである。こうした点からもまた、読解、そしてことばの運用は総力戦である。

4. 演習

4.1. 基本演習 Gomoku Chāhan

次の語や表現はどのような意味かまず考えてみてほしい。

Zutaten 1 Prise Salz Teelöffel Eßlöffel aufschlagen
salzen verquirlen

分からなくても心配はいらない。大学のドイツ語の教科書にはまず出てこない語ばかりである。次に、最初は辞書は使わず、278頁と279頁のテキストに最初から最後まで目を通したうえで、全体に目を配りながら次の問①、②に答えてほしい。そのうえで、どうしても分からず、〈この語さえ分かれば!〉という時にのみ狙撃的に辞書を使ってもよい。

① 表題の Gomoku Chāhan と写真の間で、枠に囲まれた Zutaten のところに書かれているものが何か考える。その際に、特に次の語や表現がどのような意味か考えてほしい。

Zutaten (für vier Personen)
1 Prise Salz
Teelöffel
Eßlöffel

② 279頁の A)～H)を〈正しい〉順序に並べ替える。その際に、特に下線部1)～5)について、〈何をどうする〉を考えてほしい。調理は基本的に人間の〈行為〉である。そこで通常レシピでは、〈誰が〉は料理する人、すなわち、諸君を前提とする。したがって情報の核心は〈何をどうする〉である。

解答と解説

- ① (最初から順に) 材量 (四人分), 塩一つまみ, 茶(小)さじ, 大さじ

Zutaten は, 下に挙げられている塩, 油, 米などの上位に置かれてこれらをまとめているものなので, 〈材料〉と見当がつこう。レシピには何人分の材量であるかが通常記されている。こうした目で見ると, für vier Personen は英語の for four persons を連想させることから, 四人分の材料であることが推測できよう。

Salz については, 五目炒飯に必要な材料という前提のうえで, 英語の salt からの連想により, これが塩であることは理解可能であろう。その上で, そして他の材料の表記との類似性/平行性から Prise が何らかの計量単位を表すことも見当がつくであろう。そして四人分の炒飯に使用する卵に入れる塩の量がどのくらいかと考えれば, これが〈一つかみ〉であるはずはなく, 微量であることは明らかである。

Teelöffel と Eßlöffel は油と調味料のところで使われている。この場合も他の材料の表記との関係から, 何らかの計量単位を表していることは明らかである。前者は塩に対してであり, 後者は油としょうゆに対してである。またこの二語について 〈löffel〉という部分は共通している。しがってそれぞれ 〈Tee がらみの〉 / 〈EB がらみの〉 löffel である。これらに加えて, 前者は英語の tea との連想から, 後者はこれとの対比から, あるいは慧眼な諸君は essen (食べる) との関係に思い至ることによって, それぞれが何を意味するかつきとめられたことと思う。

- ② D → E → G → B → C → H → A → F

原文ではこのようになっている。しかし 〈G → B → C〉あたりの順序は自由であろう。一方料理では, 炊飯や乾物を水で戻すなど時間のかかることを最

Japanische Küche

Gomoku chāhan

(Bunter Reis)

Zubereitung:

- 1)
- 2)
- 3)
- 4)
- 5)
- 6)
- 7)
- 8)

Hierfür eignen sich auch gut Reisreste.
Dieses ursprünglich chinesische
Gericht hat schon längst Eingang in
die traditionelle japanische Küche
gefunden. *jb/kt*

Zutaten (für vier Personen):

3 Tassen Rundkornreis	2 Eier
3 getrocknete Shiitake (jap. Pilze)	1 Prise Salz
2 Frühlingszwiebeln	3 EL Schweineschmalz oder Öl
10 Zuckererbsen	1 TL Salz
50 g Shrimps	1 Prise Pfeffer
100 g Schweinefleisch	1 EL Sojasauce

EL= Eßlöffel

TL= Teelöffel



A) Pfanne oder Wok erhitzen. 1 EL ¹⁾ Schmalz darin schmelzen. Die Eimasse hineingeben und ein lokeres Rührei braten. Auf einen Teiler geben.

B) Zuckererbsen putzen und 2 cm breit schneiden.

C) Fleisch in ca. 8 mm breite Streifen schneiden.

D) Reis waschen, kochen und etwas abkühlen lassen (vgl. JM 2/92).

E) Shiitake ca. 15 Minuten in lauwarmem Wasser einweichen. Abtropfen lassen und dann grob hacken. ²⁾

F) Den Rest des Schmalzes erhitzen. Frühlingszwiebeln, Shrimps, Zuckererbsen, Pilze und Fleisch der Reihenfolge nach dazugeben und braten. Reis schnell unterrühren. Rührei beimischen und mit Salz und Pfeffer abschmecken. Zuletzt vom Pfannenrand her Sojasauce dazugeben und alles verrühren. ³⁾

G) Frühlingszwiebeln in dünne Ringe schneiden. ⁴⁾

H) Eier aufschlagen, salzen und verquirlen. ⁵⁾

初に仕掛け、それから他のことに取り掛かるのが原則である。こうした体験や知識があれば、最初に行うのがDやEであるという判断は容易であろう。

1) フライパンないしは中華鍋を熱する。

2) 椎茸をもどす。

(訳：椎茸を15分ほどぬるま湯の中でやわらかくする)

材料にある getrocknete とは〈乾かした、干した〉ということである。また〈jap. (japanische) Pilze〉とは〈椎茸〉を知らないドイツ語圏の人たちのための説明である。これを利用して Pilze が〈きのこ〉であることも推測できるであろう。これで辞書を引かずとも、語彙が一つ獲得できる。

3) しょうゆを加え、混ぜ合わせる。

(訳：最後にフライパンの縁からしょうゆを加え、すべてを混ぜ合わせる)

情報の核心と訳文との長さを比較してほしい。文の核心は通常このように簡潔である。〈最後に〉はこの文が最後にあることから〈自明〉である。〈すべてを〉も当然のことである。また〈フライパンの縁から〉も付加的な情報である。こうすることによって、しょうゆが焦げて香ばしくなる。これはこうした技法を知らないドイツ語圏の読者へのサービスである。

4) ねぎを切る。

(訳：ねぎを小口切り(薄い輪切り)にする)

Frühlingszwiebel は日本の長ねぎとは異なる。ドイツ語圏では長ねぎが手に入らないので〈代用品〉である。しかし日本では炒飯には一般に長ねぎを使うので、われわれはこれを〈自動的に〉長ねぎと読んでしまうであろう。逆に見れば、内容的知識・背景的知識の力はそれほど強いのであ

る。炒飯に入れるねぎは通常小口切りにされる。そこで Ring は英語の ring から〈輪〉のことであり、そしてその前にあって Ring を修飾する dünn は〈薄い〉と判断されよう。しかし要は〈ねぎを切る〉である。

5) 卵に塩を加え、かき混ぜる。

(訳：卵を割り、塩を加え、かき混ぜる)

aufschlagen, salzen, verquirlen の三語を知っている諸君はまずいないであろう。しかし卵をどうかするという脈絡の中で、salzen は Salz と関係する動詞で、これが〈塩を加える〉を意味することは比較的容易に推測できよう。理屈からいえば、これによってその前にある aufschlagen が〈割る〉であり、後ろにある verquirlen が〈かき混ぜる〉という判断ができるということになる。しかしこれは実際にはそれほど容易ではない。そこで辞書の出番である。しかし残りの二語を共に引くのは中学生である。aufschlagen を引いた場合、〈割る → 塩を加える〉の延長線上で verquirlen の意味を推測し、また verquirlen を引いた場合は〈 ? → 塩を加える → かき混ぜる〉から aufschlagen の見当をつけるのが大学生というものである。

ここに出てきた多くの語彙や表現は諸君にとって初めて目にするもので、文法的にもあやふやだったと思う。しかしそれでもおおよその見当はついたと思う。それは諸君が、料理に際して一般に何をどのようにするか、そして五目炒飯がどのような材料を使って、おおよそどのように作られるかという、〈料理と五目炒飯のスキーマ〉を身につけているからである。そこで辞書を使わずとも、いくつかの語の意味内容が推測できたのは、これに裏打ちされてのことである。もしこれが、どのようなものか見当もつかない料理の作り方であれば、こうはゆかないであろう。

4. 2. 応用演習1 Rindergulasch

今回はドイツ料理である。正確にはハンガリーに由来するもののようであるが、今ではドイツの〈国民食〉である。味は異なるが、出来上がりはビーフシチューのようなものである。五日炒飯で獲得した語彙や表現が一部利用可能である。図が付いているので、辞書は主に推測の検証用に引くだけで済むと思う。どのような手順で、何をどうするか、日本語でレシピを作ってみてほしい。

解説

日本語訳は次のとおりである（註は筆者）。

材量（二人分）

玉ねぎ 大三個

（註：ドイツの玉ねぎは日本のものより一般に小さいので、数は適宜調節のこと）

油 大さじ三杯

グラシユ用牛肉 400g, あらかじめ切っておく

（註：カレーなどに用いる角切り牛肉,あるいは赤身の牛肉を角切りにして使用する）

パプリカの粉末 大さじ一杯

（註：パプリカの粉末は大型スーパー,百貨店の食料品売り場などで入手可能である）

小麦粉 大さじ山盛り一杯

塩 小さじ一杯

こしょうと塩 少々

湯 カップ三杯

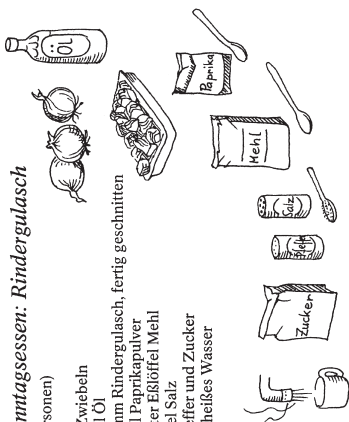
1. 玉ねぎの皮をむき、さいの目に切る。

9

Ein Sonntagsgessen: Rindergulasch

(für 2 Personen)

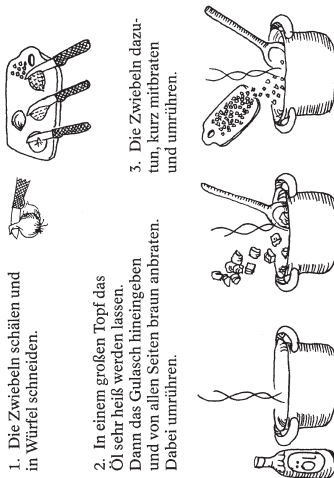
- 3 große Zwiebeln
- 3 Eßlöffel Öl
- 400 Gramm Rindergulasch, fertig geschneitten
- 1 Eßlöffel Paprikapulver
- 1 gehäufter Eßlöffel Mehl
- 1 Teelöffel Salz
- etwas Pfeffer und Zucker
- 3 Tassen heißes Wasser



1. Die Zwiebeln schälen und in Würfel schneiden.

2. In einem großen Topf das Öl sehr heiß werden lassen. Dann das Gulasch hineingeben und von allen Seiten braun anbraten. Dabei umrühren.

3. Die Zwiebeln dazutun, kurz mitbraten und umrühren.



4. Dann das Paprikapulver und das Mehl darüberstreuen. 1 Teelöffel Salz und etwas Pfeffer und Zucker zugeben.

5. Das Wasser zugeießen, umrühren und aufkochen lassen.

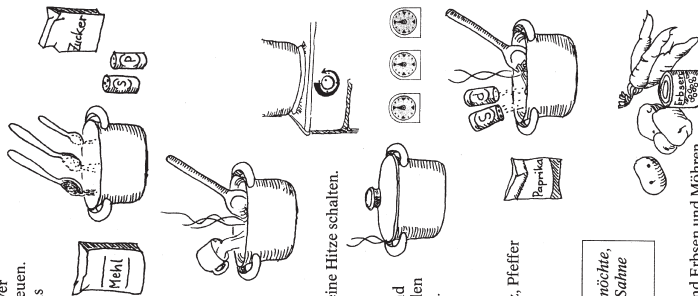
6. Die Kochplatte auf kleine Hitze schalten.

7. Den Topf schließen und das Gulasch 2 bis 3 Stunden ganz leicht kochen lassen.

8. Abschmecken mit Salz, Pfeffer und Paprika.

Wer die Soße verfeinern möchte, kann noch einen Schuß Sahne dazugeben.

Dazu passen Kartoffeln und Erbsen und Möhren.



2. 大きな鍋に油を入れて十分に熱する。肉を入れ、全体に焼き目がつくまで炒める。
3. 玉ねぎを加え、さっと炒める。
4. パプリカの粉末と小麦粉を振り入れる。塩小さじ一杯とこしょう、砂糖を少々加える。
5. 湯を加えて軽くかき混ぜ、煮立てる。
6. 弱火にする。
7. ふたをして、2～3時間煮込む。
8. 塩、こしょう、パプリカで味をととのえる。

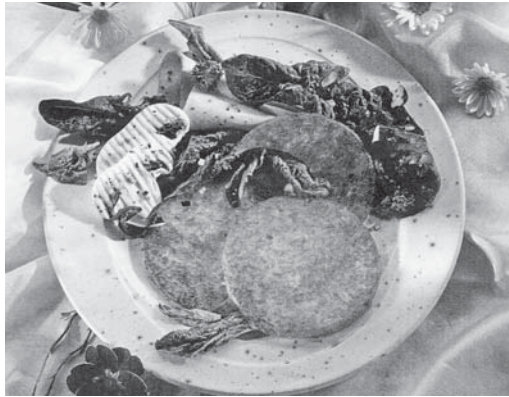
ソースをまろやかにしたければ、生クリームを少し加える。

グラシュの付合せには、じゃがいも、えんどう豆、にんじんが合う。

ここでは読解力養成という目的のためにレシピを利用している。しかしレシピを読む本来の目的は、料理を作るためである。簡単にできて美味なので、実際に作って食べてみてほしい。これによって読解が真に完結する。

4. 3. 応用演習2 Reibekuchen

これもドイツ料理である。286頁のテキストの表題にある〈Reibekuchen〉と〈Kartoffelpuffer〉は同じである。〈Kartoffelpuffer〉のことを Westfalen 地方では〈Reibekuchen〉というようである。写真手前の円形のものであれは。材料は異なるが、出来上がりはお好み焼きか小型ホットケーキのようなものである。A)～H)を〈正しい〉順序に並べ替えてみてほしい。五目炒飯と Rindergulasch で獲得した語彙や表現が利用可能である。辞書は狙撃的に、あるいは推測が正しいかどうかの検証にのみ引くこと。



Kartoffelpuffer mit Pulenbust und Spinat

(Eppert F., 裏表紙)

解答と解説

G → A → F → B → C → H → E → D

日本語訳は次のとおりである (註は筆者)。

材量

(註：何人分かは明記されていない)

生のじゃがいも 1 kg

玉ねぎ 一個

(註：Rindergulasch の場合と同様、大きさに注意)

卵 二個

小麦粉 (または挽き割り麦) 50g


塩

油

食べる時にりんごの砂糖煮

図10

B. Reibekuchen oder Kartoffelpuffer
(Reibekuchen sagt man in Westfalen.)




Reibe
reiben

Die Zutaten:

1 kg rohe Kartoffeln
1 Zwiebel
2 Eier
50 g Mehl (oder Grieß)
Salz
Backfett oder Backöl

bei Tisch
Apfelkompott



A) Jetzt wird die Zwiebel geschält und ebenfalls gerieben.

C) Mit einem Löffel gibt man den Teig in die heiße Pfanne und macht etwa 3 bis 4 flache Plätzchen.

D) Guten Appetit!

E) Man gibt die Reibekuchen sofort, wenn sie noch heiß sind, zu Tisch und serviert dazu Apfelkompott.

F) Alle Zutaten (die Eier, die geriebene Zwiebel, das Mehl und genügend Salz) werden unter den rohen Kartoffelbrei gemischt und zu einem Teig verrührt.

G) Die rohen Kartoffeln werden geschält und gewaschen und dann grob gerieben (mit einer Reibe oder Raspel).

H) Wenn die Reibekuchen auf der unteren Seite goldgelb gebacken sind, dreht man sie um und läßt sie auch dort goldgelb werden.

—Die Zubereitung: 1)– 2)– 3)– 4)– 5)– 6)– 7)– 8)–

(Bei größeren Mengen bitte zählen, wer die meisten ißt. In vielen Familien gibt es erstaunliche Rekorde.)

(Eppert F., p. 50をもとに原口が教材化)

- G 生のじゃがいもの皮をむいて洗い、おろし金などで粗くすりおろす。
- A 玉ねぎの皮をむき、同様にすりおろす。
- F すりおろしたじゃがいもに残りのすべての材料(卵, すりおろした玉ねぎ, 小麦粉, そして塩を十分に)を加えてかきまぜ、生地を作る。
- B フライパンに油をたっぷり敷き、十分に熱する。
- C スプーンで生地をフライパンに入れて平らにならし、3個から4個を一度に作る。
- H 下面がきつね色に焼けたら、ひっくり返し、同じように焼く。
- E 熱いうちに食卓に出し、りんごの砂糖煮を添える。
- D 召し上がれ!

(たくさん食べた時には、誰が一番多く食べたか数えてみてほしい。多くの家庭には信じられないような記録がある)

これは安く手軽にできるので、〈おやつ〉や軽食に向いている。これも実際に作って食べてみてほしい。

この三つのテキストを読んだだけでも〈Öl〉, 〈Salz〉, 〈Prise〉, 〈Pfanne〉, 〈erhitzen〉などをはじめとして、かなりの数の語彙が自力で獲得できたはずである。さらに読み進めれば、料理関係の語彙はかなり集中的に蓄積できることが想像できるであろう。

そして諸君が望む〈使える外国〉にとってまず不可欠なのは、ここで行ったように、テキストの全体を見渡して、行きつ戻りつしながら、言語的、非言語的の別を問わず、さまざまな手掛かりから推測を働かせることによっておおよその見当をつける能力である。したがって、料理が好き、あるいは料理体験が

豊富な諸君は、そうでない諸君に比べて一般にこうしたテキストは読みやすいはずである。こうした意味で、レシピを読むに際しては料理の能力もまた読解能力の一部である。なぜならば、読解は総力戦だからである。

5. 推薦図書

狭義の読解法のみならず、学習心理学、外国語の学び方、情報の扱い方に關する参考図書を最後に挙げておく。更に広く深く学び、読解のみならず、ことばや情報を適切に使いこなしてほしい。

関口一郎。(2000)。「学ぶ」から「使う」外国語へ。集英社新書。

著者の主張は、題名のとおりである。即ち、日本人が外国語を苦手とするのは、「お稽古事」のように教室の中で熱心に学んでばかりいて、実際に使って何かをしようとしなからである。外国語に上達するためには、あらゆる機会をとらえて積極的に使い、使うことを通して学ぶことを心掛けなければならないと著者は強く訴えている。本書では、外国語学習の心構えのみならず、自らの体験に基き、実際の勉強方法もまた具体的に説明されている。著者はドイツ語教員であることから、ドイツ語の例が多い。しかし外国語学習について本書に述べられている考え方と具体的な方法は、英語をはじめ、何語についても共通する。本当に外国語を身につけたい、留学したいなど考える諸君にはぜひ一読を勧めする。筆者も本書から大きな影響を受けた。

西林克彦。(1994)。間違いだらけの学習論 なぜ勉強が身につかないか。新曜社。

〈詰め込み学習法の最大の問題点は、詰め込めないこと〉ということが本書の出発点である。人間が外界をどのように認知し、学習し、記憶するかという認知心理学の観点から、学習と学習法をめぐる多くの誤解を解き明かし、それ

に代る方法を提唱している。人間がテキストを理解する仕組みが実例として多く使われていることから、読解の理の入門書としても有用である。

鷺巣由美子. (2006). 改訂版 ドイツ語を読む. 三修社.

筆者が知る限り、非訳読的読解法のドイツ語の参考書としては日本で唯一の出版物である。前書きには次のように記されている。

外国語のテキストを読む、ということは、それを日本語に置き換える(= 翻訳) こととは違います。日本の外国語教育では、長いこと、講読という
と訳読を指していましたが、両者は、密接に関連するとは言え、まったく
別の行為です。[…] /この本の目標とするのは、テキストの単語ひとつ
ひとつを調べてその訳を並べるといった解読方式から脱皮することです。

こうした考えに基づき、〈時刻表〉、〈ぶどう酒のラベル〉、〈レシピ〉から文学に至るまで、さまざまなテキストがレベル順に取りあげられている。

堀栄三. (1996). 大本営参謀の情報戦記 一情報なき国家の悲劇. 文春文庫.

著者は徹底して調べ上げて得た情報を積み上げ、感情を交えることなくこれを分析、洞察し、米軍の来攻予測を次々と的中させた「情報の職人」である。台湾沖航空戦の〈大戦果〉に沸きかえる基地の中で、著者は帰投した搭乗員一人一人に、具体的な戦闘状況などについてただ一人冷静かつ徹底的に聞いた。その結果、これが全くの誤りであることを確信し、大本営に上申する。しかしこの情報は握りつぶされ、米艦隊が壊滅していることを前提として行われたフィリピン作戦は失敗し、大きな損害を出すこととなった。本書は、情報にどう接し、どう扱うべきかという問題について教訓となることが多い。また一人の軍人として、人間としての立派な生き方の書でもある。

- (5) 学校課題とは「それをうまく解いたとしても本来何の意味もない課題、学習者にとって内発的に興味を引くものでもないし、それを解いたことが他の人々に役に立つ、といった社会的な意義をもつものでもない、しかし序列化の基盤として使われるために取り組むことが『強制』される、といった意味である」(波多野・稲垣, p. 138)。

参考文献

- 川田侃・大島英樹. (1993). 国際政治経済辞典. 東京書籍.
 甲田直美. (2009). 文章を理解するとは 認知の仕組みから読解教育への応用まで. スリーエーネットワーク.
 戸部良一他共著. (1991). 失敗の本質 日本軍の組織論的研究. 中公文庫.
 関口一郎. (2000). 「学ぶ」から「使う」外国語へ. 集英社新書.
 谷口賢一郎. (1992). 英語のニューリーディング. 大修館書店.
 波多野諠余夫・稲垣佳世子. (1984). 知力と学力 一学校で何を学ぶか一. 岩波新書.
 室潔. (2011). 「今、一番心配なこと 一大学を去るにあたって一」. 『早稲田大学教育学部報』, 第106号. 早稲田大学教育学部.
 バルト・ロラン／花輪光訳. (1979). 物語の構造分析. みすず書房.
 Westhoff, G. (1997). *Fertigkeit Lesen*. Fernstudieneinheit 17. Langenscheidt Verlag.

筆者がドイツ語読解教育、第一言語としての日本語教育などについて書いた論文類はすべて〈早稲田大学リポジトリ〉と早稲田大学商学部のホームページ(早稲田大学商学部 → 商学同攻会 → 文化論集)で公開されている。関心がある向きは参照されたい。

教材出典

- 朝日新聞.
 東京都新宿区環境部廃物利用推進課. (1993). 新宿区廃物利用推行手冊.
 波多野諠余夫編. (1980). 自己学習能力を育てる 学校の新しい役割. 東京大学出版会.
 Bransford, J. D. & Johnson M. K. (1973). Considerations of Some Problems of Comprehension. in: Chase W. G. (ed.): *Visual Information Processing*. New York and London: Academic Press, p.p. 383-438.
 Bruel-Steffens, M. u. Wagener-Drecoll, M. (1990). *Tausendmal gerührt ... Kochen von Anfang an*. Stuttgart: Ernst Klett Verlag für Wissen und Bildung.
 Eppert, F. (1994). *Deutsch in Küche+Restaurant Eine Einführung in die Fachsprache der Gastronomie*. Ismaning: Max Hueber Verlag.
 JAPAN magazin. 4/94, 2/99.
 Frankfurter Rundschau.
 Obermayer, H. J. (1971). *Taschenbuch Deutsche Dampflokomotiven Regelspur*. Stuttgart: Frankh'sche Verlagshandlung.
 Westhoff, G. J. (1987). *Didaktik des Leseverstehens Strategien des voraussagenden Lesens mit Übungsprogrammen*. München: Max Hueber Verlag.